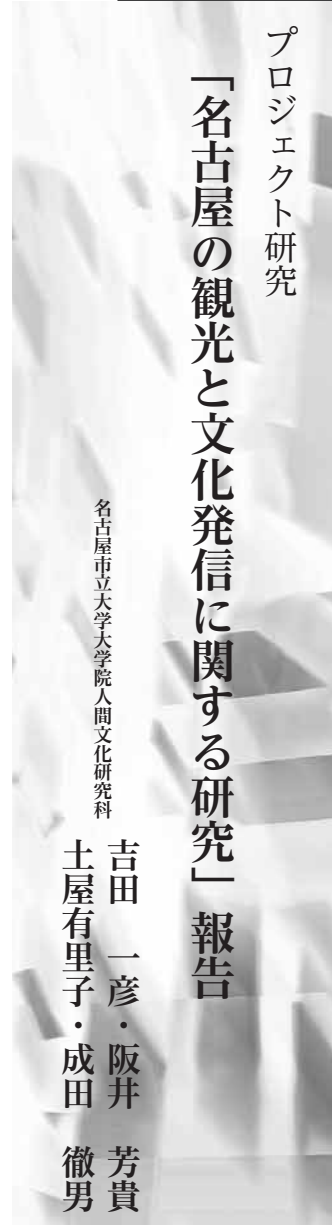


プロジェクト研究

「名古屋の観光と文化発信に関する研究」報告

名古屋市立大学大学院人間文化研究科

吉田 一彦・阪井 芳貴  
土屋有里子・成田 徹男



一

る次第である。

二〇一六年度、私たちは人間文化研究所共同研究プロジェクト「名古屋の観光と文化発信に関する研究」を実施して、名古屋の観光、そして文化発信の問題について考究した。研究代表者は吉田一彦、研究分担者は成田徹男教授、阪井芳貴教授、土屋有里子准教授である。このプロジェクト研究は、人文社会学部のオムニバス講義「名古屋と観光」と連動させて進めている。また、二〇一六年度は、名古屋市観光文化交流局の事業「やっとかめ文化祭二〇一六」と連携して、名古屋市役所と名古屋市立大学の連携企画を実施することができた。窓口になって市役所と本学をつないでくれた同局文化歴史まちづくり部の藤井章氏、吉田祐治氏に心より御礼申し上げます。

今年度のやっとかめ文化祭には、また、本学教員だけでなく、本学学生が参加して、複数の企画を実施することができた。意欲的に文化祭に参加し、種々のアイデアを提案し、当日は運営の裏方として、あるいは舞台に立って活躍してくれた学生諸氏にも心より敬意を表する次第である。

やっとかめ文化祭は、名古屋市が行なう文化祭で、「時をめぐり、文化を旅する、町の祭典」と銘うち、本年度は十月二十九日～十一月二十日の日程で、「芸どころまちなか披露」「芸どころ名古屋舞台」「まちなか寺子屋」「まち歩きなごや」の四つのテーマの九十六のプログラムが実施された。

名古屋市立大学との連携企画としては、「まちなか寺子屋」に、吉田一彦「史書に描かれた尾張氏

のミステリー」(十一月三日、聖徳寺)と、阪井芳貴・アユチ雅楽

会「はじめての雅楽―名古屋市立大学連携・特別講座―」(十一月六日、名古屋博物館講堂)の二つを、「まち歩きなごや」に、土屋有里子「和歌と信仰に彩られた文学の郷へ」(十一月十三日、富部神社など)を作ることができた。「はじめての雅楽」では、アユチ雅楽会による雅楽の演奏とともに、名古屋市立大学学生も出演した「桜人(さくらびと)」の復曲歌唱があり、解説も名古屋市立大学学生が担当した。また「和歌と信仰に彩られた文学の郷へ」では、名古屋市立大学学生が歌枕ゆかりの寺社を案内した。

また、教養教育の授業科目「地域連携参加型学習」履修学生のうち、吉田一彦班(一年生学生十一名)が「やっとかめ文化祭の研究」

というテーマで、この文化祭に参加して感想、意見を書き、また来年度以降の企画についてそれぞれの見地から提案してくれた。これを冊子体の報告書(全七三頁)にまとめる予定である。

さらに、「地域連携参加型学習」履修学生の吉田一彦班・水野みか子班の学生は、十一月十四日に、名古屋市立大学特別研究奨励費による研究(研究代表者・芸術工学研究科横山清子教授)によって名古屋市立大学を訪れていたタイ国のプリンス・オブ・ソングラー大学の学生九名、教員二名の方とともに名古屋能楽堂に行き、「狂言体験」を一緒に体験することができた。

私自身は、名古屋熱田区の聖



まちなか寺子屋・熱田区聖徳寺にて

徳寺（浄土宗西山禅林寺派）を会場に、尾張地域の古代豪族の雄である尾張氏の実像と草薙剣の謎について市民に語り、その後この地の歴史に関心がある市民の方々と意見交換することができた。私は、この日、草薙剣について、まだどこでも話をしたことのない私の見解、つまり新ネタを披露した。いざれ論文にまとめたいと考えている。なお、この日は同寺の御厚意により、市民の方々とともに、元弘三年（一三三三）九月三日の銘を持つ、貴重な聖徳太子像を特別拝観することができた。大きな収穫であった。

名古屋から文化を発信するといふこの事業はとても重要なものだと考えている。今後とも、名古屋市役所と連携してこの事業に関わり、発展させていきたいと考えている。

（吉田一彦）

## 二

今年の「やっとかめ文化祭」で名古屋市立大学との連携をとのお話をいただいて、すぐに思い浮かんだのが、筆者が顧問を務めるアユチ雅楽会の演奏会を名古屋市博物館で催す、という企画であった。



はじめての雅楽ポスター

これは単なる思い付きではなく、従来から温めていた二つの思惑が背景にあったのである。

一つは、やっとかめ文化祭と博物館をリンクさせることである。文化祭は名古屋の文化・芸能を築きもうというイベントであるにもかかわらず、博物館が文化祭に関わることがなかったのが不思議であり、もつたいたいと感じていたので、良い機会であると考えたのである。もちろん、そこに名古屋市立大学の博物館サポータークラブM.A.R.O.を介在させることも念頭においていた。M.A.R.O.はこの七年間に名古屋市博物館と市立大学のさまざまな連携事業を企画・運営し成果を上げてきたが、「文化財活かし隊」として新たな領域へのチャレンジをさせたいと思っていたからである。

二つ目は、アユチ雅楽会の活動を広く市民に知らしめたいという思惑であった。一昨年の名古屋市立大学人文社会学部設立二〇周年



まちなか寺子屋・はじめての雅楽・アユチ雅楽会

の記念式典におけるこの雅楽会の演奏と演舞は、非常に厳かで格調高く出席者の多くが感嘆した。伊勢神宮をはじめとする東海地方の寺社での演奏披露を行っているとはいえ、一般市民への披露の機会には乏しく、いっぽう市民も雅楽に親しむ機会ほとんどないので、やっとかめ文化祭で演奏会が開ければ、双方にとって意義深いと考えたのである。

そして、企画を具体化する中で、名古屋市の無形文化財に指定されている催馬楽「桜人」をM.A.R.O.メンバー、すなわち市立大学の学生が演奏するという無謀とも画期的とも言える内容を盛り込むことになったのである。このことは、M.A.R.O.にとっては「文化財活か



催馬楽の復曲・桜人

し隊」として願ってもない体験となり、名古屋市の文化財の保存・継承という観点においては、「桜人」は保存会の方々が維持しているとはいえ、大学生のような若者が取り組んでいるわけではないので、これを契機に若者が関心を持つことになれば非常に意義深いものとなると考えられた。なお、以上のような筆者の思惑と関係者の想い、企画の意図を勘案し、やっとかめ文化祭の「まちなか寺子屋」企画として、タイトルは「初めての雅楽」とした。

八月半ばからM.A.R.O.の有志九名がアユチ雅楽会の指導のもと、まったく未知の世界であった雅楽、催馬楽「桜人」の歌唱に挑戦を始めたが、雅楽会の方々も驚く上達

ぶりであった。おそらく楽しみながら習ったので、上達も早かったであろう。そして、十一月六日の本番は、名古屋博物館講堂がほぼ満席になるほどのお客さまに恵まれ、大変上出来の歌唱を披露できた。保存会の方々も大変喜ばれ、「桜人」の伝承の新たな世界が切り開かれたことを確認できた。

なお、演奏会当日は、雅楽および演奏曲目の解説に吉田一彦教授のゼミ生二名がプレゼンテーションをおこない、またMAROとともに独自のパンフレットの作成にも携わり、やっとかめ文化祭に多角的に参画できたことも大きな成果であった。

さて、これまで企画そのものについて述べてきたが、最後に名古屋の観光という観点での意義について触れておく。筆者は、やっとかめ文化祭を名古屋の伝統文化の再発見・再評価につながる重要なイベントであると考えている。それは、名古屋市民自身がまずこの町の歴史・伝統・文化を楽しむことからスタートしない限り、昨年の調査で示された「全国一行きたくない都市」という名古屋市にとって不名誉な状況の打破は難しいと感じているからである。その立場から、上述したように伝統文

化について学ぶ場でもある名古屋博物館がこのイベントに没交渉であることは大きな損失だと感じてきた。博物館がこうしたイベントに関わることで、名古屋城や徳川美術館と並ぶ名古屋の観光の拠点のひとつとして認識されるようになれば、博物館にとっても活性化につながり、名古屋の観光にもプラスになると考える。今回の企画がその端緒となっていれば幸いである。

(阪井芳貴)

### 三

今年度、「やっとかめ文化祭」で何か企画を、というお話をいただき、土屋ゼミ(四年生七名、三年生二名、二年生六名)で「まち歩き」を担当することになった。ゼミは以前から名古屋の文学、文化等に関わり、御朱印マップの作成等も企画していたため、流れるには無理はなかったが、いざ一つ



まち歩きなごや・パンフレット



まち歩きなごや・和歌と信仰に彩られた文学の郷へ

の企画を学生主体で立ち上げるとなると、多くの時間と勉強、労力を必要とした。

二〇一六年六月からゼミ時間を使い企画に入り、当初は通常の御朱印巡りにありがちな、恋愛成就や学業成就に関する寺社を巡る案も出されたが、最終的には日本文学のゼミである特質を生かし、「歌枕(古来から和歌に詠み込まれている景勝地)」をテーマとしたコースを組むことになった。

まずは文献資料をもとに愛知県(尾張・三河)の歌枕を網羅し、地図上で場所を確認、歌枕との関連を調査、確認した。コースはあらかじめ二時間程度とされていたので、時間内で巡れる範囲内に場所をしばり、最終的に歌枕である



解説する学生&やっとかめ大使

「年魚市潟(あゆちがた)」と「寒の里(よさむのさと)」関連の寺社を巡るコースとし、「歌枕をゆかりの寺社をめぐる御朱印の旅」と命名した。

その後、「尾張名所図会」で関連記事を解説し、コースに組み込む富部神社、白毫寺、高座結御子神社にゼミ生を三班に分けてフィールドワーク実施、神職さんにインタビューも行い、パンフレット掲載記事の情報収集に努めた。二年生は後期ゼミ開始前にも関わらず参加してくれ、上級生の行う文献資料の調査方法、フィールドワークの方法を間近で学んでくれたので、知識や研究方法の伝達が生徒に出来たことは収穫であった。

後期授業開始と共に、パンフレット作成の準備に入った。文章、写真等、各班が発表を通して全体的に調整し、卓越した技術を持つ二年生がデザイン全般を行い、四年生によるパソコン技術を駆使した独自のコラムも入り、完成に至った。

本番一週間前の十一月六日(日)にゼミ生全員でコース全体のリハーサルを行った。

十一月十三日(日)は快晴で、十六名の一般参加があった。九三〇に富部神社集合、白毫寺に向かい、呼続駅から名鉄で神宮前駅へ、きよめ餅総本家で休憩、歩いて夜寒の里旧跡を経て高座結御子神社で解散となった。一般の方の満足度は高かったが、シャイな学生がなかなか一般の方と交流できなかったこと、解説にユーモアが足りなかったことは、今後の課題となった。

六月から十一月まで、全てのゼミ時間及び休日フィールドワーク等を要し、準備は本当に大変だった。しかし本番が近づくにつれ、学生の学びは自主的に、先輩から後輩への知識や技術の伝授も自然なものとなっていった。その成長ぶりは傍目にも明らかであり、本番終了後の達成感に満ちた皆の

顔を見て、疲れも吹き飛んだ次第である。

最後になりましたが、今回の企画にご協力頂きました、熱田神宮、高座結御子神社、富部神社、白毫寺、きよめ餅総本家の皆様に心より御礼申し上げます。

(土屋有里子)

#### 四

昨年度、案内表示の多言語化の実態調査をおこなった。今年度はその調査結果をもとに、博士後期課程大学院生の文秀秀とともに、サブプロジェクトとして、「案内表示の多言語化の問題点についての研究」をすすめた。特に、調査結果によると設置場所や設置主体によるばらつきがあり、表示対象や表示方法について不統一な点があることが明らかになっているので、それを踏まえて検討をおこなった。大学院博士後期課程学生の研究経費については、「学術研究遂行協力制度(RA)」を活用させていただいた。

具体的には、まずピクトサインなどもふくめた多様な表示のそれぞれの現状と問題点を整理した。名古屋では、「英語、中国語簡体字、ハンブル、ポルトガル語」が

目安となっており、英語が第一で日本語表示と同等の大きさで併記し、他の表示は表記がやや小さ目で、すべての項目には併記していない。日本全体としては「英語、中国語簡体字、中国語繁体字、韓国語」が多く見られる。多言語表示は、地域によって異なるのが前提となっている。いずれにしても、視認性の問題があるので、多言語化と言っても数種類にとどまる。

また、語用論的観点や言語景観論の視点に立ち、「誰のための表示か」「誰が設置する表示か」というふたつの方向から、問題点を分析、検討した。たとえば「ひらがな」「ローマ字」の表示や、ピクトサインは、なぜ必要か、どこに必要か、目的を定めることによつて大きな効果が期待できるが、機械的に横並びで「あればいいだろう」という表示になる危険性がある。また、たとえば道路の標識は国土交通省が「英語表示」を標準化しようとしているし、JRや私鉄の表示の規則と、地下鉄などの地方自治体の公共交通機関とでは、異なる点がある。駅の乗り換え誘導などでは、このように管轄が多岐にわたることによる混乱をさけるために、自治体による調整、

場合によっては強力な主導が望まれる。

名古屋城では「スマホで見よう!名古屋城」スマホでタッチ!名古屋城」というスマホを利用した案内表示、解説表示が始められている。外国からの観光客や、スポーツの国際大会への参加者や観客に対しては、スマホのソフトの充実、自治体や各種施設のホームページの多言語化がますます望まれるであろうし、一部ではどんどんすすんでいるものと思われる。こちらでは視認性とか長さとかをあまり考慮しなくてもよいので、「来訪者への文化発信」という側面から積極的にすすめられるべきものであろう。

(成田徹男)